

## でっかい恩返し

岩手県立盛岡農業高等学校  
動物科学科 2年 西塚 和貴

「将来の夢は、何ですか。」多くの人が、この質問に答えられると思います。「その夢は昔からの夢でしたか。」おそらく、この質問には「違う」と答える人もいるのではないのでしょうか。実は、私自身がそうでした。我が家では家業として祖父の代から酪農業を営んでいるにも関わらず、私の夢は中学2年生の時点まで家業とは違うものでした。

小さい頃は牛と遊ぶのが楽しかったので、「牛屋になりたい」と真剣に考えていた事もありましたが、段々と家業を継ぐというよりも、家業を継がなければならないと強制的な感じがし、他の仕事をしようと考え始めました。過去の私は色々な事を怠けてばかりの人間でした。本当は、ただ単に面倒臭くてやる気がなかっただけかもしれません。昔から、私の母は「お前のやりたい事をすればいい。」と言ってくれました。なぜなら、母は強制的に家を継いだからです。その言葉を聞いても、「そう言いながら、結局は自分に継いで欲しいんだろう。」と、中学校に入った頃から思うようになりました。

今振り返ってみると、自分は何を考えていたのだろうか…そう思います。そんな自分が、今は酪農業を志すようになったきっかけは、中学2年生の時のある出来事でした。ある日、母が泣いていました。滅多に泣く事のない母が泣いていたのです。私は何か大変な事があったのかと思い、話を聞いてみました。すると、どうやら私が生まれる前の事について涙を流しているようでした。私には、父がいません。父は私が生まれた後すぐに家を出て行ったそうです。どうやら、その事を誰かから「あなたのせいだ。」などと悪く言われ、泣いていたようでした。でも、私はそれ以上詳しく尋ねる事はせず、ただ母の話を聞いていました。それから少し日が経った頃に、私は自分の父について母に聞きました。父は、私が生まれる前から、母達が働いた金を使い込み酷い生活をしていたというのです。その生活がどんなものだったかは、あの時の涙が物語っていました。それを考えると、私をここまで育てていくのに大変な苦労があったと思います。私を女手一つで育ててくれた母に少しでも恩返しがしたい、そう自然に思うようになりました。考えに考えた結果、母が一生懸命に取り組んでいる酪農業を継いで、立派な姿を見せる事が一番の恩返しだと考えました。「誰かのために酪農業を継ぐのは、おかしい。それでは、長くは続けていけない。」そう思う人もいるかもしれません。でも、私は母に恩返しができるなら、どんなに辛い事があっても耐え抜いていく覚悟でいます。見ていて欲しい人、見守ってくれる人がいるからこそ、頑張れる事もあると私は信じています。

酪農業を継ぐ事を決心した私は、もっと多くの知識が必要だと考えました。そして、昨年の春、岩手県立盛岡農業高等学校の動物科学科へ入学しました。1年生の頃は、

畜産を学びに来た仲間達との出会い、やりがいのある実習を通して、酪農業をしたいという気持ちが更に強くなりました。そして、2年生の今年から畜産班を専攻し、乳牛や酪農経営について学んでいます。さらに、私の気持ちを後押ししてくれる出来事がありました。今年の夏にインターンシップとして、北海道恵庭市の中川牧場で2週間研修をする機会をいただきました。中川牧場では搾乳牛を40頭飼育しており、我が家と同じ中小規模ですが、乳量は我が家の1.5倍近くあり、個体管理が抜群に行き届いている牧場でした。そのため、乳房の張り具合や体型も素晴らしく、牛群検定で80点以上の牛がほとんどで、EX牛も1頭います。昔は、スーパーカウもいたそうです。その素晴らしい牧場で多くの事を学ぶ事ができました。特に勉強になったのは「共進会」です。研修中に全道の共進会予選が行われ、5頭出場する予定になっていました。私は、共進会に向けて牛洗いや毛刈りの手伝いをしました。作業をするにあたり、中川さんから「牛洗いは本当に大切。共進会の1~2週間前から洗うべき。毛刈りよりも重要。」と教わりました。毎日しっかり洗った結果、牛が見違えるほど綺麗になり、未経産牛がジュニアチャンピオン、経産牛は各部で上位入賞という優秀な成績をおさめました。改めて、私はすごい所に研修に来たのだと痛感しました。今まで高校でも共進会に向けて準備をし、出場はしてきました。遥かにハイレベルな酪農の聖地での今回の経験を生かし、高校卒業後は、我が家でも共進会に挑戦していきたいと考えています。

研修を通して、搾乳や一般管理における我が家の改善点を見つける事もできました。その1つ目は、「牛床」についてです。我が家では敷料は何も使っていません。放牧酪農を行っている事もありますが、出産が近い牛におがくずを敷く程度です。しかし、中川牧場で1日に使用する敷きワラの量は、一頭当たりかなりの量でした。それを見て、たとえ牛舎内にいる時間が少ないとしても常に敷いて準備をしておくべきだと思うようになりました。牛が休みたい時に快適に休む場所があるという事は、牛のストレス軽減に繋がるはずですが、早速、母に聞いてみたところ、我が家の近辺では入手が困難だという事でした。今は無理でも、私の代になった時には、牛の為に遠くからでも調達、もしくは我が家の土地を活用して敷料を準備したいと考えています。2つ目は、「暑熱対策」です。中川牧場では、送風機2台と扇風機4台を使用していました。研修時は北海道も猛暑日が続いていましたが、牛舎内がとても涼しく、逆に少し寒く感じられる位でした。我が家では送風機2台を使用していますが、夏場は朝夕を除き、常に牛舎内が暑く感じられます。電気量を抑えたいところではありますが、牛にとって快適な環境を考え、配慮すべきだと思うようになりました。「牛床」も「暑熱対策」も、酪農経営において基本的な事ではありますが、そこから変えていく必要があると実感しました。その他にも多くの事を学び、私が将来行いたい酪農経営のイメージがより明確になりました。

卒業後は、盛岡農業高校の専攻科に進み、我が家の手伝いをしながら家畜人工授精師の資格を取得する予定です。現段階で経営の規模拡大は考えていませんが、「今までの頭数で、今以上の乳量の牛」を育てたいと考えています。規模拡大も必要な事ではありますが、省力化の為に機械導入など、設備投資の資金が必要です。今あるものを活かし、低コストに抑え、機械に頼らず自分の目で見て触れながら個体管理をし、牛との信頼関係を築き、牛のストレスを軽減できるような経営をしていきたいです。

我が家は今年、大雪や大震災により被害を受けました。大雪では、農機具やローダー、自家用車の車庫2カ所が雪の重みに耐えられずに潰れ、農機具の大半と自家用車も壊れました。また、停電から復旧までに5日ほどかかり、搾乳ができず、多くの牛が乳房炎になり、治すのに半月もかかりました。残念ながら、そのうち何頭かは廃牛となりました。大震災の時は、発電機を使用して搾乳はできたので、最初被害はさほどないように思えました。しかし、1週間ほど出荷ができず、牛乳を捨てるしかなく、収入が全くない状況になりました。大雪の為に落ち込んだ経営が、やっと回復した矢先の出来事だったため、苦しい時期が長く続き、現在に至っています。

このような出来事があり、将来への課題も多く、大変な状況になってはいますが、母が「お前が継ぐと言ってくれるなら、頑張っ続ける。」と言ってくれました。母の期待に応える為にも、諦めずに頑張りたいと思います。私の事を「そうまでして、なぜ親の為に頑張ろうとするのか」と思う人もいるかもしれませんが、私は親に感謝し、恩返しする事は当たり前だと思っています。私は絶対に後悔したくないので、必ず夢を叶え、立派な酪農家として母に「でっかい恩返し」をします。